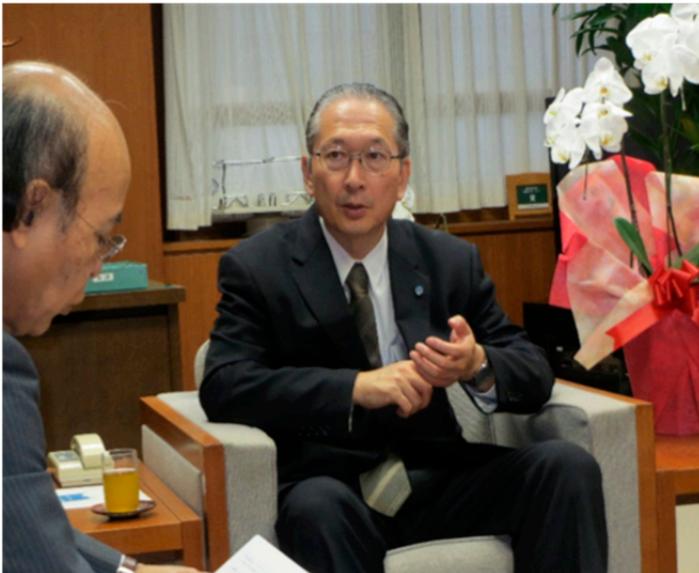


今、労働運動が一番必要とされる時 ——神津里季生・連合新会長に聞く

2015年10月に開かれた連合第14回定期大会で新会長に選出された神津里季生（こうづ・りきお）氏に、稲葉康生・日本労働ペンクラブ代表が、日指す労働運動や抱負などを聞いた。

——まず、労働運動に入るきっかけからお聞きします。

神津 昭和54年、新日鐵に入社して3年3か月後に本社に異動し、そこで職場委員を経て支部書記長をやった。27歳で本部専従になった。



神津会長（右）にインタビューする労ペン稲葉代表

——労働運動には学生時代から興味がありましたか。

神津 学生時代は野球部のマネージャーをしており、それに明け暮れていたのですが、労働運動に関心は持っていなかった。会社に入った時にも、組合役員をすることは考えていなかったが、組合役員となり、多くの人と付き合いの中で、みんなが共通の日標をもって活動する労働運動に興味を持つようになった。

——日本の労働運動は長い間、低迷している。組織率の長期低下傾向に歯止めがかからず、17%にまで下がった。新会長としてどのような労働運動を目指すのか。

神津 本来は今、労働運動が一番必要とされている時代状況だと思う。しかし、それに気が付かないで苦しんでいる人が多い。そこに私たちの運動が見えるようにすること、そして手を差し伸べることに、一層重点を置いてやっていく必要がある。

連合組合員は2007年に665万人で底を打って反転し始めており、現在は682万人にまで増えた。組合員は一気に増えるわけではないので、社会に向けて連合のアピール力を強めることに心血を注いでいきたい。構成組織、地方連合会、そして連合が三位一体となって連携して運動をしてきたが、主役は働く人や困った人たちであるという基本を、連合や構成組織、単組が共通認識を持って取り組んでいきたい。

●働く人への発信力をつけたい

——「連合を知らない」「労働運動の姿が見えない」という声もある。

神津 2015年9月のインターネット調査では、回答者の46%が「連合を知らない」とし、特に若い人や女性の認知度が低い。働く人たちに対する発信力が弱いことが労働運動の大きな課題であり、何とかしたい。

——パートや派遣など非正規労働者の割合が働く人の4割にもなった。将来、半分以上が非正規という可能性も高い。人口減少社会となり就労人口が減っていくので、手をこまねいていると労組への加入者も減っていく。正規社員が増えない現状では、非正規労働者の組織化を積極的に進めて必要があります。



抱負を語る神津会長

神津 連合の今期の組織拡大目標である71.9万人に対し、実績は30.7万人となり、初めて30万人を超えた。うちパートが16.3万人いる。非正規の組織化は道半ばだが、非正規組合員は90万を超えており、非正規の個人加盟を認める仕組みも作った。今後もさらに組織化に取り組んでいく。

——連合は大企業の正社員中心の組合であり、非正規労働者の組織化に熱心ではないという指摘もある

神津 労働の現場では、働く人たちの根底には「支え合い・助け合い」の気持ちはある。だが、放っておくと、組合費を払っている組合員のための運動になりかねない。自分たちの近くで働いている非正規の労働条件の問題が最終的には自分たちにもはね返ってくるので、運動の輪を広げていく必要がある。

●春闘、参院選で結果を出す

——新会長として何を重点に取り組むのか。

神津 まずは春闘で結果を出すこと。甘利大臣は「3%（賃上げ）」などと気楽なことを言うが、実際に交渉するのは労使であり、現在の経済状況からみて並大抵のことではない。この2年間で賃金引上げの流れが生まれているが、それはまだ組織内にとどまっており、全体の「底上げ・底支え」という課題がある。

二つ日は2016年の参院選だ。今の政治を許してはいけないという意味で民主党は改選議席を上回ることが必要だ。民主党の改選議席が多く大変だが、全力を挙げて取り組みたい。

労働運動は長い「冬の時代」から脱することができるのか?これが連合発足以前から労働取材をしてきて思うことだ。正社員が減り、非正規労働者が4割にも増える中、労働運動再生への道筋と具体案を示すことが、神津新会長をはじめ労働運動のリーダーに求められている。